

## 「ナガサキ」での被爆60年目に区切りをつけたかった

ストーンウォーク福岡 ■ 福田 耕三

2005年7月2日、ナガサキからヒロシマへ600キロ、アメリカ在住の平和団体によるウォークが実施されるとのことで、私も独自で参加。思いは「ナガサキ」での被爆60年目のあの日に区切りをつけたかった。

戦争とは何だったのか。あの日から平和を願い、誓いながら60年。現実には悲しい。いまだに世界に平和が届かないもどかしさ。

ナガサキの原爆記念公園に来てみたら、私が55年前に訪れた碑の下に、ウォークの石碑が安置されていた。再び私をこの石が呼んでくれたのか？ 感動の中で、私はこの石と共に歩こう。戦前戦後のすべてをこの石の中に埋め、無心に戻り、もう一度新しい生き方を探そうと、

歩くことを決めた。だが、もう老体。完歩は不能。しかし、仲間たちがいた。独りではなかった。同じ思いの人々に助けられ、ただひたすら歩き続けた。真夏の炎天も、流れ落ちる汗も日焼けもまったく気にならなかった。黙々と歩き続ける仲間たちに支えられ、無心の中で歩いた。ただひたすら次世代への平和を石に祈り託した。

8月4日、目的地のヒロシマで、石との再会。32日間を歩き続けてきた仲間たち。道中を支えてくれた多くの無名の人々。感動の中で石との対面を果たし、初めて訪れるヒロシマの原爆でドームまでを再び歩くことができた。

ヒロシマの街は、にぎやかだった。平和公園を訪れる人々。世界各国の顔があった。現代の顔はどこにでもあふれている。だが、私たちの思い、願いが届くの



北九州での交流会で長崎での被爆体験を語る筆者

かどうか、それは、現世代に生きる若者たちに期待しよう。

私たちの願いは、決して押し付けるのではなく、一人ひとりに伝えていくしかない。誰かが振り向いてくれ、平和への道を同伴してくれることを祈りたい。

32日間の仲間たちに思いを寄せ、私はヒロシマのドームの下で、60年という歳月を改めて、「生きてきて良かった」と、石碑に手をふれ、祈りを込めて帰ってきた。 2005.9.6

## 大多数の人が「核廃絶」訴え 世界平和を望むでしょう

ストーンウォーク福岡 ■ 井上 志朗

私は、お遍路八十八カ所の残り二十九カ所を終わらせるため四国に渡り、香川県の善根宿一まんだらーでCさんと出会いました。それは6月14日、Cさんから話しを聞いた瞬間私の頭の中のイメージはすでに長崎の平和公園に向かっていました。

7月1日、浦上駅で久しぶりの再会、資料館近くに二人で野宿。7月2日、ア

メリカ人、支援者、一般参加者の方々と合流。初日という事もあってかなりの人数、華やかな出発でした。長崎での移動は、比較的平坦な道が多く疲労感はさほどなく、期待と不安が入り交じり、気持ちもハイテンションであったので実に楽しい時間を過ごしたと思います。長崎最終日、佐賀県との県境、行けども行けども上り坂、約1時間半、ストーンと台車合わせて2トンを大雨の中押し続けやつの思いで峠越え、佐賀県に入る。その瞬間、拍手喝采、感動の嵐、全員の気持ちが一つになり幸福の一時を過ごした。その喜びもつかの間、支援者が3人しか来ていなかったの、感激が吹き飛んでしまいました。

佐賀県では人数は少なかったが、日程には余裕があり、交流会が重視され、宿泊、その他に格別の配慮をして頂き感謝感激しました。

博多でたまたまスピーチの機会に恵まれ、各県の支援者の方々のサポートに対しお礼、感謝の気持ちを述べ敬意を表した。

神湊でも、おいしいお魚、歓待に感激しました。

私は、アメリカ人、日本

の参加者と出来る限りのコミュニケーションをはかり、人との出会いに「一期一会」の素晴らしさを実感しました。

全体を見て感じた事は、リーダーがおらず、統制が取れなかった、アメリカ人とのコミュニケーション不足、原爆投下へのお詫び行脚より9・11を主なテーマにしてしまった事を残念に思いました。

全員の参加者との様々な触れ合い、1ヵ月間いろんな事がありました。その光と陰、良いも悪いも含めて、体験出来た事は意義深い事であり、参加を決断した事は正しかったと思っています。

これら多くの出来事は、一生忘れられない、良い思い出として残るでしょう。誰が戦争を望むでしょうか！ 大多数の人間が「核廃絶」を訴え、世界の平和を望むでしょう！ 「ノーモア広島、ノーモア長崎」平和公園、ドーム、資料館、イベント参加すべてが初体験であり、すべてが新鮮でした。7月2日出発～8月4日到着。延べ600km……。みんなの力でストーンを広島ドームに無事運んで来ました。これは、みんなの誇りです。出来得るならば、ストーンが広島平和公園の一角に設置される事を切に望みます。最後にアメリカ人、ストーンウォーク参加者のみなさんに心から感謝します。ありがとうございます。南無弘法大師遍照金剛菩薩。



福岡市の交流会場で。前列左から2人目が筆者 撮影 ■ 池田 道子